長谷川恒男 in フンザ

長谷川が愛したウルタルとそのふもとに広がるカリマバード村

ちきゅう 時の歩き方

1991年10月、ウルタル登はん途中の長谷川恒男（長谷川昌美さん提供）

名峰に確かな足跡

1947～1991

7000㍍級の山々を背景に美しい農村風景が広がり、「桃源郷」とたたえられるパキスタン北部のフンザ地域。ここにそびえるウルタル2峰（7388㍍）に挑み、命を落とした登山家長谷川恒男は、愛した山に抱かれるように眠っている。

長谷川恒男　横浜市出身。23歳でプロの登山ガイドになる。1977～79年にかけて、マッターホルン、アイガー、グランドジョラスの欧州アルプス3大北壁の冬季単独初登はんを達成。世界のトップクライマーとして活躍した。グランドジョラス登頂はドキュメンタリー映画「北壁に舞う」（79年）にもなった。

1991年10月10日、午前10時10分。当時未踏だったウルタル2峰に挑んだ長谷川を雪崩が襲った。わずか200㍍後方にいて直撃を免れたパキスタン人の登山家ナジール・サビールさん(55)は「戦闘機が頭の真上を通り過ぎたかのような音だった」と振り返る。

前日の夜、親友の長谷川と夢を語り合ったばかりだった。サビールさんが「登山学校を開きたいと思っているんだ」と打ち明けると、「俺もその夢に加えてくれよ。しばらくここに残りたい」とうれしそうに応じてくれたという。長谷川は、フンザとそこに住む人々を心から愛していた。

「ハセガワ・ソング」を披露するハヤットさん（前段右から3人目）

フンザ地域の中心地カリマバード村から約3時間。息を切らしながら3300㍍地点まで登ると、長谷川が遭難前にベースキャンプを構えた山腹にたどり着いた。登山隊の副隊長として同行していた妻の昌美さん(58)の「頂上の見える場所で安らかに眠ってほしい」という希望で、遺体はキャンプ跡地の一角に埋葬されている。村は周辺の土地を提供してくれた。

カリマバードに学校を作る構想は、昌美さんが引き継いだ。寄付を募って回り、「ハセガワ・メモリアル・パブリックスクール・アンド・カレッジ」が96年、仮校舎で生徒40人でスタートした。

地元住民歌い継ぐ「ハセガワ・ソング」

学校を訪れると、教室は22室まで拡大し、日本の幼稚園児から高校生にあたる787人の児童・生徒が学んでいた。パソコンルームもあり、ラフマット・カリーム副校長(37)は「地域でもトップクラスの教育環境」と胸を張る。

地元住民の長谷川への思いは、アミール・ハヤット教諭(46)が作った「ハセガワ・ソング」に凝縮されていた。

♪「バイ　ハセガワ　ハミシャー　ジンダー」（長谷川は永久に生き続ける）

地元デルシャスキー語の歌詞には、「どうもありがとうございました」と日本語も交じる。生徒の一人は「素晴らしい機会を与えてくれたハセガワさんのことを、私たちは忘れません。彼は私たちの心の中で生きているんです」と語った。

日本では毎年10月10日、長谷川の命日に合わせて、東京・奥多摩山域で「日本山岳耐久レース　長谷川恒男CUP」が開催され、20周忌の今年は、コース上の長尾平（青梅市）に長谷川の業績を記した記念碑が建立された。

しかし、パキスタンの治安悪化でフンザを訪れる日本人など外国人観光客は激減しているという。長谷川が愛してやまなかったフンザでその足跡に多くの人々が再び触れられる日が来ることを願う。

（文と写真　横堀裕也）